

あとがき

前著『道教・民間信仰における元帥神の変容』にも書いたように、自分は中国の現在の神信仰がいかに発展していったかを研究課題としている。ただ、前著においては、宋から明にかけて信仰された「元帥神」という特殊な神格を中心に扱ったため、現在の信仰との関連がやや薄いものとなってしまった。もちろん、閔帝や趙公明・王靈官などの神は元帥神から信仰が発展していったものである。しかし、その他の『道法会元』に記される膨大な数の元帥神の大半は、現在では、ほとんど廟や道観で祀られることは無くなってしまった。

本書『明清期における武神と神仙の発展』において扱った武神や仙人は、哪吒太子にしろ、玄天上帝にしろ、八仙にしろ、四天王にしろ、その多くが現在でも盛大な信仰を有するものである。また中華圏においてこれを祀る数多くの廟が存在する。その意味では本書の方が、現在の神信仰に繋がる、より詳しい情報が含まれていると言えるであろう。

また何時出せるかは不明であるが、次の著作においては、宋から明代にかけて信仰が盛んであったのに、その後ほとんど中華圏における信仰が衰退し、日本の寺院にかえって残っている神々を扱うつもりである。この三種の著作によって、宋から清までの神信仰の大まかな流れを示すことができるのではないかと、勝手に考えている。

本書に収められた論考の多くは、かつていずれかの媒体に発表したものを改変したものである。自分はインターネット上のサイトにおいて論考の公開を行っているが、本書に収録された文章は、ネット上で公開しにくいもの、または、情報を補うべきでありながら、これまで果たせなかったものが大半である。

例えば、第六章の「十二天君と蘇州玄妙観」では、発表時には肝心の十二天君の像を示すことができなかつたし、第七章の「明清期における四天王像の変容」においても、重要な情報である四天王の写真を付けていなかった。

これらの論考は本書によってようやく完成版となったという形である。以前の拙論をご覧になった方には、誠に申し訳なく思う次第である。また第三章「太歳殷郊考」は、海外などから公開の要望が多かった論考であるが、パソコンではなく、ワードプロセッサ機を使用していた時期に書かれたもので、データが残っていなかった。しかも、執筆当時のままでは到底出せない内容のものであった。これについては、後半部分は全部と言ってよいほど中身を改変した。本書にはこのような経緯を有する論文が多く含まれている。以下に、各章ごとの経緯について簡単に記す。

第一章の「哪吒太子考」は、代表的な武神である哪吒太子を扱った。この論考は、もとは第一回日米道教会議において発表するために中国語で書かれたもので、拙論の中でも最も多く海外の研究者に引用されるものである。日本語版については、雄山閣出版の『道教の歴史と文化』に収録されていた。哪吒太子は、現在でも台湾の各地において盛んに祀られる神である。しかし、それが元来仏教神であり、複雑な変遷を経て道教の神となったことはあまり知られていなかった。その過程について論じたものである。今回の改訂において、多数の図を付した上、表現を大幅に変えている。

第二章「玄天上帝考」は、武当山を本拠とし、明代においては武神の代表格と見なされた玄天上帝、すなわち真武大帝について論じたものである。ただこの文章は、『東方宗教』第91号に発表した「玄天上帝の変容——数種の経典間の相互関係をめぐって——」と、『中国古典小説研究』第2号に載せた「『西洋記』に見える玄天上帝下凡説話」、及び『中国都市芸能研究』第4輯に掲載された「2005年夏期武当山諸宮観調査報告」の三種の論考を組み合わせたものとなっている。実はこの形がかつて早稲田大学に提出した修士論文「明代道教における武神の研究——特に玄天上帝・哪吒太子について——」での形式に近いものである。恥ずかしながら、本書の第一章と第二章は、要するに修士論文を基礎として発展させたものである。

第三章の「太歳殷郊考」は、『論叢アジアの文化と思想』第3号に掲載された「太歳殷元帥考」を元に行っているが、ほとんど原形を留めぬほどに書き

改めてしまっており、別論文と称してもよいくらいになっている。また殷元帥については前著でも扱ったために、幾つかの記録が重複している。ただ、この神格の日本への影響については、まだ論ずるべき所が若干残っている。これは次著への課題としたい。

第四章「華光と関帝」は、春秋社の『福井文雅博士古稀記念論集——アジア文化の思想と儀礼——』に収録されたものである。これも主に多数の画像を加えることにより、内容が大きく変化している。仙台の大年寺にある古い華光像の写真を撮らせてくださったことに感謝したい。

第五章「八仙過海故事の変容」は、五曜書房の『東方学の新視点』に掲載されたものである。八仙については、言うまでもなく中華圏では最も知られた神仙である。しかし、その李鉄拐・漢鍾離・呂洞賓・張果老・何仙姑・藍采和・韓湘子・曹国舅という人員が定まるのは、明末になってからのことである。拙論では『八仙東遊記』を中心に、その故事の変容について検討した。

第六章「十二天君と蘇州玄妙觀」は、元は『東洋大学中国哲学文学科紀要』第12号に掲載されたものである。雷部の元帥神を扱ったものであり、前著との関連が深い。ただ、雑誌掲載時には、肝心の十二天君の像や並びについて示すことができず、甚だ問題のあるものであった。今回、十二天君の写真について、写りが非常に悪いとはいえ示すことができ、ようやくそれなりの形になったと考える。

第七章「明清期における四天王像の変容」は、元々は青史出版の『宮澤正順博士古稀記念東洋——比較文化論集——』に掲載されたものである。仏教での武神といえば、真っ先に想起されるのがこの四天王であろう。しかし、その形象は中国と日本では大きく異なる。このことが意外に認識されていないため、やや専門外の問題であるとはいえ、敢えて論じた次第である。これについても、重要な情報であるはずの四天王の写真を全く示していなかったという欠点があったので、今回この点を大きく補った。なお、この論考はまだ問題提起にしかっていない。中国の現在の四天王像と同じ形象のものは、韓国の寺院にも見られるし、ネパールの寺院にも見られる。恐らく、チベット仏教の影響があるものと思われるが、これが何時の時期なのかがまだ明確

でない。四天王のそれぞれによって違うという説もある。例えば韓国の多聞天は、多く塔を持っており、傘を持ってはいない。チベットの影響と言っても、元代に作られた四天王像は、平遙に残されたものを見る限りでは琵琶や傘などは持っていない。恐らくは明代にこの形象が形成されたと推察されるが、その詳細な経緯については、中国のみならず、アジア全体に関わる問題として調査していきたい。

第八章「明代における天師張虚靖のイメージ」は『東洋大学中国学会会報』第7号に掲載され、第九章「張虚靖と地祇鄴都法」は『関西大学文学論集』第54巻3号に掲載されたものである。張虚靖については、前著とも関連が深いですが、これまであまりその問題点については論じられていないと感じ、通俗文学の資料を中心に検討してみた。

私事になるが、実はここ数年、幾つかの大型プロジェクトに加えていただくことになり、研究・運営面で多忙を極めることになった。

関西大学の学内では、東西学術研究所・思想儀礼班の研究員になったのをはじめとして、文部科学省私立大学学術フロンティア事業である東西学術研究所・アジア文化交流研究センター（CSAC）の一員となり、その研究活動に参加することになった。また学外では、文部科学省の科学研究費特定領域研究（2005～2009年度）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成（にんぷろ）」の現地調査部門・民俗信仰班の研究代表者として、計画の一端を担うことになった。

さらに、文部科学省のグローバルCOEプログラム「関西大学・東アジア文化交渉学のエデュケーション拠点」の推進委員に任ぜられ、文化交渉学専攻の立ち上げに参画することとなった。そして文部科学省の大学院教育改革支援プログラムに採用された「関西大学EU—日本学教育研究プログラム」にも参加することになった。これに加えて、文学部の教学主任も担当することになり、教務の面でも多くの用務を抱えることとなった。

さすがに、これほど大型プロジェクトや業務が重なることは、生涯にも減多に無いことであろうと思われる。この結果、ほぼ毎週と言ってよいほど、

何かしらの研究会や会合があり、年間365日、授業か会議か業務でなければ、研究会参加か現地調査を行っているという状況に陥った。もっともこれは以前別の大学にいたとき、業務の煩雑さから、「研究で忙しいのは羨ましい」などとあさましく羨望したバチが当たったものと思われる。またこの間、多くの学会や研究会を欠席することとなったことについては、深くお詫び申し上げます。

本書が形になるまで、多くの方にご協力をいただき、またご迷惑をおかけすることになった。東西学術研究所所長の橋本征治先生、アジア文化交流研究センター（CSAC）センター長の松浦章先生、思想儀礼班代表の吾妻重二先生をはじめとする東西学術研究所及びCSACのスタッフには感謝申し上げたい。またグローバルCOE拠点ICISリーダーの陶徳民先生、サブリーダーの藤田高夫先生、同じく内田慶市先生、寧波プロジェクト（にんぷろ）代表の小島毅先生、現地調査グループの代表の岡元司先生には、この間多大なるご迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。そして事務的な手続きをお任せした東西学術研究所事務室の門田知子氏・宇野英里子氏、遊文舎の西澤直哉氏に特にお礼申し上げます。さらに、訪れた多くの寺院や廟においては、様々なご協力をいただいた。特に、宇治の萬福寺、仙台の大年寺、京都の大將軍八神社、武当山太和宮、上海白雲觀には感謝申し上げます。

2008年冬 二階堂 善弘

関西大学東西学術研究所研究叢刊29

明清期における武神と神仙の発展

平成21年 2 月25日 発行

著 者	関西大学東西学術研究所研究員 二 階 堂 善 弘
発 行 者	関西大学東西学術研究所 〒564-8680 吹田市山手町 3 丁目 3 番35号
発 行 所	関 西 大 学 出 版 部 〒564-8680 吹田市山手町 3 丁目 3 番35号
印 刷 所	株式会社 遊 文 舎 〒532-0012 大阪市淀川区木川東4丁目17番31号

©2009 NIKAIDO Yoshihiro

Printed in Japan

ISBN978-4-87354-465-6 C3014

落丁・乱丁はお取替えいたします